Tohoku Philosophical Association

●第54回大会研究発表要旨

# 日本中世の人間観に関する一考察

## ――『説経節』をめぐって――

木村　純二

本研究は、日本倫理思想史研究の立場から、『説経節』を題材に、日本中世における人間観の一端を考察したものである。『説経節』は本地譚の形式を取り、今祀られている仏菩薩ももとは「人間」であったと語り出して、やがて仏菩薩となるべき人間が現世において受けた苦しみを描いている。その苦しみは決まって家族の断絶であり、断絶しながらなお求め合う親子の情愛こそが「人間」の本質として捉えられているのである。

まず注目されるのは、初期説経の『かるかや』である。他の説経では主人公の欠損から物語が始められるが、『かるかや』の主人公重氏は、何らの欠損も持たない現世的繁栄の体現者として登場する。その重氏が「老少不定」を悟り出家することで、家族の断絶が生じるのである。しかし、重氏の出家が「老少不定」の悟りによるものであるならば、それは家族への薄情さゆえにではなく、情愛の深さゆえであると捉えられるべきであろう。そのことは、現世での徹底的な断絶の果てに、浄土で親子の名乗りを果たす結末部分に対応している。重氏一家が親子地蔵として祀られるのは、その過剰なまでの情愛に「人間」の根元的な姿が現れているからである。初期説経『かるかや』においては、生の拠りどころの喪失を観念において先取りし、来世での成就に差し向けるという古代後期以来の浄土教の思想的枠組が残されている。

父の流罪や子種がないといった現世的欠損から物語の始められる他の説経においては、欠損の回復の運動が物語の展開を構成しており、結末として何らかの現世的成就が要請されることになる。そのため「家」の繁栄という近世的なモチーフが導入されることになるが、それは副主題としての位置付けを超えるものではなく、主題はあくまでも親子の直接的な情愛にあると考えられる。

『しんとく丸』において、主人公しんとく丸の父信吉長者は、前世に雉の母子を焼き殺したために、父鳥の恨みを受け子種がないのだとされる。雉の母鳥は、「命があれば、子をばまうけ



NII-Electronic Library Service

Tohoku Philosophical Association

て又も見る。その子捨てて立てよ」と呼びかける父鳥に対し、「世にも不便と思ひしに、この子においてはえ捨てまい」と答え、焼け死ぬのである。ここでは子は、絶対的に代替不能な情の対象として描かれている。そして、子種がないところを無理に申し子をしてしんとく丸を得たために母御台所が命を落とすが、信吉長者は「家」の繁栄のためにすぐに後妻をめとる。しんとく丸は、それに対し「情けなの父御やな」と恨み言を述べる（『あいごの若』でも同様）。「子」や「父」「母」、あるいは「夫」「妻」を代替可能なものと捉える視線は、「家」の繁栄においては不可欠なものであるが、説経節はそれを「情け」のないことと語るのである。

『まつら長者』のさよ姫に典型的に見られるように、説経節においては、親が命に代えて申し子をしてようやくに子どもを得ると、今度はその子ども自身がみずからの命を犠牲にして親を求めてゆく。ここには、子に身体生命の存養を求める近世の儒教的な「孝」概念とは異なる非合理的な情としての親子の捉え方が認めらる。

総じて、説経節においては、主人公が代替不能な存在として「父」「母」「子」の存在を求めるがゆえに苦しみを覚え、そのことに周囲の人々は心動かされる。それは、人々の内にありながら日常的には鈍化されている親子の情愛を、主人公の言動が喚起し屹立させるからに他ならない。だからこそ、人々は主人公を神仏として祀るのである。それは副次的に語られる「家」の再興に集うのが、かつての郎等に限られていることと対照を成している。

説経節は、神仏そのものよりも「人間」の姿に目を向ける点において、中世的な彼岸志向を脱するものであるが、その「人間」の根元的な姿が日常的人倫性を突破するものである以上、近世的な此岸志向とも異っている。真実に人間でありきった者こそが神仏として祀られることになるという逆説性に中世末期の独自の人間観を見ることができ、今後更に検討すべき課題が多くひそんでいると思われる。

（きむら　じゅんじ・弘前大学人文学部助教授）

※　本稿は、二〇〇四年度文部科学省科学研究費補助金「若手研究（B）」（課題番号16720002）による研究成果の一部である。



NII-Electronic Library Service